走り読み文学探訪リバイバル(その18)

「寺山修司歌集」　著者:寺山修司

国文社(現代歌人文庫③、207p,980円,1983年)　　紹介者：榎本博康

［紹介］

◇「空には本」昭和33年6月、的場書房

海の休暇

日あたりて遠く蝉とる少年が駈けおりわれは何を忘れし

日あたりて雲雀の巣藁こぼれおり駈けぬけすぎしわが少年期

わが夏をあこがれのみが駈け去れり麦藁帽子被りて眠る

少年のわが夏逝けりあこがれしゆえに怖れし海を見ぬまに

祖国喪失　Ⅱ

勝ちながら冬のマラソン一人ゆく町の真上の日曇おり

マラソンの最後の一人うつしたるあとの玻璃戸に冬田しずまる

◇未刊歌集テーブルの上の荒野　昭和46年1月、風土社

テーブルの上の荒野

たった一人の長距離ランナー過ぎしのみ雨の土曜日何事もなし

煮ゆるジャム

今日も閉ぢてある木の窓よマラソンの最後尾にて角まがるとき

［感想］

寺山修司はかつて、「詩は走りながら書く」と言った。同じ青森県出身の三上寛は、首から下げる画板に原稿用紙を貼りつけて、土手を走りながら詩作したという。

もちろん寺山修司は、「詩とは今動いている心臓の鼓動をそのまま書くことであり、詩人の感性の鮮度こそが詩の価値である」と言いたかった。三上寛も重々それは承知していたが、でもそれを愚直に形に表すことで、現代詩を体現したかったのだと思う。

田村隆一さんが亡くなった(1998年8月26日、75歳)。戦後の詩壇を代表する詩人だった。昭和22年に友人らと創刊した「荒地」は文学史上のモニュメントである。彼には、現代詩はチンプンカンプンだという意味の発言がある。きっと叙情の欠落を言いたかったのだろう。

叙情は現代芸術の最大の敵であった。美術はカンデンスキーの抽象に端を発し、ピカソらのキュービズム、ダリらのシュールレアリスムなどを経験し、オブジェを価値の中心に据えた。音楽はロマン派を否定し、いわゆる現代音楽として物質的な音の世界に突き進んだ。これは詩の世界でも同様である。

このような20世紀、まして戦後に叙情を歌うことは、希有な才能を必要とする。なまじの感性であれば、ことごとく万葉集などの古典に歌われているものに及びもつかない。

寺山修司は複雑である。輝くような才能で18歳に歌人としてデビューし、後に劇団天井桟敷

Copyright © Enomoto PE Office, All rights reserved.

を率いての戯曲や、映画にその才能を発揮した。しかしながら彼の作品には陰がある。彼は青春とは残酷なものだと言ったが、それは多くの青年達の心を貫いた。こんな当たり前のことを、どうして誰も言ってくれなかったのだろうと。

なぜ言えたのか、そのひとつの背景として、彼は強烈なマザコンであった。結婚したが、二階のアパートの窓ガラスに小石のつぶてがパラパラと当たる。開けて見ると、小走りに駈け去る母の後ろ姿があったという。結局離婚。その母は死に、寺山修司も若くして死んでしまった。（1983年没、47歳）夭折するのが詩人の務めでもあるように。

思い切って自己流の解釈を試みる。

まず最初の4首を見てみよう。ここには若き詩人が、彼を巡る時間の早さ、そして何も知ることなく死を迎えることへの絶望を歌っている。その早さは、いかに彼が疾く走ろうとも、決して追いつくことができない。彼は60歳の自分という将来を信じていない。18歳の今に手にできないことは、全て死後の献花でしかないのだ。幾ら疾く走ろうとも決して追いつくことのできない時とは、青春の残酷さに他ならない。疲れて少年は眠る。その間だけ、時はそっと少年の寝顔を伺いに来る。寝たふりをしていた少年は、がばっと起きて時を捕まえたかに思えたが、時は遠い砂丘の上を、かすかに砂粒をこぼしながら、軽ろやかに走り去って行くだけだ。

次の2首ははっきりとマラソンを歌っているが、それはマラソンの非日常性であり、流行りの言葉で言えば祭りである。一首めは祭りの始まりであり、何の変哲もない平凡な町が、トップランナーが走ってくるのと共に、普段は下ばかり見ていた住民達の視線が、空をも含んだ空間と、疾走するランナー達の速度をとらえた大きな視野に変化する。しかし二首めでラストランナーが過ぎると、また日常に戻ってしまう。生きるということ、生活するということは、ラストランナーが過ぎたあとの絶望的に長い時間のことである。

次の2首は叙情である。まず最初の句であるが、前の2首と違って、たった一人なのでレースではない。雨の土曜日に一人だけで長距離を走る若者がいる。彼にとって重要な目的があっての練習であろうか。雨の日も休まない、そのひたむきさに少しばかり心を揺るがされた。その道は、雨の日とはいえ、通行人も車両の通過もあっただろう。でも寺山修司にとっては他のものは無いも同然で、そのランナーだけが心に残った。なぜならば寺山修司もまた、彼のひたむきさで机に向かうなどしていたのだろう。家の内と外ではあるが、二人の若者はそれぞれの道を一歩づつ歩んでいる、その共感が静かに、ゆっくりと寺山の心に染み込んでいったのだ。

次の句はこれまでの句とは、全く立場が違う。寺山修司が走っているのだ。何と愛らしい風景であろうか。中学だろうか高校だろうか、彼もクラブ活動などで学校の周囲を集団で走ったのだろうか。それとも単なる彼の空想であろうか。窓が閉じている家、そこにかつて彼は麗人の影を見たのであろうか。その部屋の主はどうしたのだろうか。何かの事情で遠くに行ってしまったのだろうか。それとも病を得て、病院にいるのだろうか。まさかどこかに嫁いでしまったのではないだろうか。何とかして確かめることはできないだろうか……。彼は、悟られることなく集団走の最後尾に位置して、誰にも見られることなく、その窓を、まだ幼い彼は自分でそれとは自覚できぬまま、恋するもののまなざしでその窓を見つめるのである。

（初稿1998.8.29）

［リバイバル感想］

久しぶりに自分の書いたものを読んで、わあ気取ってるなあと思った。このような書き方をしてみたかったのは良く分かる。良く書いたぞ。良し悪しではなく、やはりその時にしか書け

Copyright © Enomoto PE Office, All rights reserved.

ないものってある。

だから昔の自分の邪魔をしないで、さっさと終わろう。でも最後の歌はいいなあ。マザコンの若き寺山が、窓辺の年上の女性に片恋慕するとは。で、彼のために思いを伝える古典的な手段を描いた絵をサービスに掲載しよう。これができないから短歌ができる。

とか言いながら、さらに。

私はとうとう天井桟敷を直接見ることが無かった。それが残念でならない。その時でしかできないこと、見られないこと、絶対に逃してはならないと思う。実は私は対立する、といいう構図にはめられていた、状況劇場の方のファンであり、唐十郎、李麗仙と優秀な俳優たちに心を奪われていた。特に私の記憶に残っているのは、「腰巻お仙妖鯨篇」（上野不忍池）で、根津甚八と小林薫がそれぞれの箪笥を階段のように上り下りし、箪笥の上を捕鯨船の船首に見立てて、そこに立つ刃刺しと化す、幻の玄界灘に繰り広げられる素晴らしいアクションに夢中になった。役者達の肉体表現はすごい。

それ以前の公演では、その時は新人の小林薫が流しの兄弟という設定で、「そして神戸」をギターを弾きながら歌い上げた。この役者の可能性を感じたところ、瞬く間に根津に並び立つ二枚目役の双璧に駆け上った。

The Message(部分)、チャトラパティ・シバジ・マハラージ博物館（ムンバイ）収蔵（写真撮影許可料金を支払いました。）(2020.1)

この絵は２階バルコニーでのことだが、インドの昔の窓は通風のために透かし彫りであり、いかにも情緒がある。

いや、寺山修司の話だ。天井桟敷のヒロインであったカルメン・マキ（デビュー曲は「時には母のない子のように」）が後に結成したバンド、カルメン・マキ＆OZ(1972～1977年)のライブを聴いたことがある。彼女の持っているカリスマ性はすごかったが、OZは未だブレイク前だったと思う。ステージからはける時に、なぜか客席側の通路を使ったので、思わすマキに触ってしまったが、不愉快だったと思う。ごめんなさい。

その夜から数十年、ANAで飛んでいる時に機内番組でゲスト、カルメン・マキとして偶然にその声と歌を聴くことができた。全く知らなかった。日本国籍を得て現在も活躍していて、OZが再結成されたと。OZ時代の名曲、「私は風」をしみじみと聴いた。

(2020.7.09)

Copyright © Enomoto PE Office, All rights reserved.